
School Days on Rail ～みんな乗る気です！

静岡運転所

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

School Days on Rail ～みんな乗る気です！

【Nコード】

N6832Q

【作者名】

静岡運転所

【あらすじ】

鉄道が近くを通っていなくても、学校や家にいても、鉄道研究部「鉄研部はちゃんと活動してるんです！重度の鉄道好き《テツ》である広裕を始めとする鉄研部員の日常を描いた短編集。

第一講 あやねの超混沌ヘケイアーティク〈ターミナル講座（前書き）

このシリーズは、

- ・拙作「みんな乗る気です！」の番外編です。
- ・旅メインの本編とは趣が異なり、学校と家の話がメインです。
- ・基本的に一話完結型です。
- ・単作として読める仕様になっていますが、本編読後に読むことをお勧めします。
- ・それではまたしてもゆっくりしていつてね！！

第一講 あやねの超混沌へケイアーティク〈ターミナル講座

第一講 あやねの超混沌ターミナル講座ケイアーティク

四月も既に半分が過ぎ、あれほど咲いていた桜もすっかり葉桜になっ
ていました。

放課後、クラスを離れた私、仙崎あやねは慣れた足取りで部室に向
かっていました。

私が入っている部活は鉄道研究部。若干六名ながら、月に一度旅に
出る部活です。旅に出るのが大好きな私にとってまさにうってつけ
の部活に思えたのです。もちろん私は旅が好きなだけで、鉄道には
興味のきの字もありませんでしたが、さして問題ないだろう 何
も知らなかった私はそう高をくくっていたのです。

おりしも、部長の那智先輩からそろそろ例の旅行（研修旅行という
そうですが）に行くという旨の話を聞いた翌日でした。否応なしに
私のテンションは上がっていました。軽やかなステップを踏む私は、
まだ鉄研部の深さに気づいてはいなかったのです。

部室は校舎から少し離れた部室棟にあります。コンクリートででき
たこの建物には鉄研部を始め小さな文化部系の部活が入居していま
す。鉄研部の部室はその二階の一番突き当たりにあります。どの部
室もドアから何から基本デザインは同じで、鉄研部の場合ドアに掲
げられた『関係者以外立入禁止』のプレートくらいしか違いがあり
ません。

ドアを開けようとすると先輩たちの話し声が聞こえてきました。四
人いる先輩たちは揃って熱心で、大抵私が行く前に集っています。
だから気にも留めなかったのですが……

恐る恐るドアを開けると、

「だから東京が一番だって！」

「そうでもないぞ。終着の本数はそんなないわけだし。もつとも、新宿は通り過ぎるのばっかだけだ」

「それはJRだけの話でしょ。小田急とかいければ……」

部室の中央を占有するテーブルには三人の先輩がいました。その三人が今、私の眼前で喧々諤々けんけんがくがくの議論を繰り広げていました。滑河先輩の言葉でかろうじて鉄道の話らしいということはわかりましたが、それ以外はさっぱりです。

「天下の東海道本線だって東京が発だし……あ、あやねちゃんだ」

「それを言うなら新宿だってありでしょ……あら、こんにちは」

「残念ながら櫛形ホームがない時点で……お、こんにちは」

茫然自失として固まる私に先輩たちが気づかって声をくれます。しかし目の前の会話が全く　全く！　理解できず、私の頭はパニック状態を迎えていました。

「あの……先輩、なにを語ってたんですか」

だから私の口からこんな質問がついて出ました。

「ああ、今ね、東京のターミナルはどこかって話してたんだよ」

子供をあやすようにそう言うのは部長の那智なち広裕先輩です。女子が多いこの部活で、男子の先輩としては唯一の存在です。私に対して子供扱いなのを除けば普通にいい先輩です。

ただ、この先輩、かなり重度の鉄オタなんです。口を開けば半分は鉄道の話をしますし。

「正確には『東京のターミナル駅を一つ挙げる』といわれたらどこか、だけど」

どこか落ち着いた口調の滑河なめがわ時子先輩。窓から吹き込む春風に長い黒髪が舞っています。顔に浮かぶ妖艶な笑みといい、メリハリのあ
る細い体軀フォルムといい、とても一つ上の先輩とは思えません。那智先輩には失礼ですが、滑河先輩の方がまだ普通に話す余地があります。

「あ、ところであやねちゃんはどこが一番だと思う？」

気さくに北浜結那きたはま ゆづな先輩が尋ねてきます。那智先輩より頭一個分小さい先輩ですが（そんな私は北浜先輩より拳一つ分は小さいですけど）

、胸元では二つの膨らみがブラウスをはつきり押し上げています。同じ女としては羨ましい限りです。……自分と比較したらなんだか泣けてきました。ぐすん。

那智先輩と幼馴染みというのは伊達ではなく、なんとなく私の扱いも似てる気がします。というか私に話を振られても。ええっと、タミナルってなんだろう。とりあえず東京の有名なところの駅を挙げればいいのか……鉄道がよくわからない私ですが、旅でよく東京に寄る関係で山手線の駅ぐらいならわかります。

わずかな知識を元に私が見つけた答えは、

「えっと、品川……？」

確か結構な数の路線に乗り換えられた気がしたのですが……

はあ、と那智先輩が嘆息を漏らしました。

「そっか、品川か……かみいぢゅみれ 上市と一緒に……」

上市、とは今ここにいない^{プロボーション}上市先輩のことでしょう。こちらモ

デルに負けないほどの体形です。どうしてもこの部活の先輩たちはこ
うも美少女揃いなんでしょう。起伏のない私では勝負になりません。
この世に神様がいらっしゃるだしたら神の御業というのは意図的に差別
を作り出すことなのかもしれません。

それはさておき。

「うーん、確かに東海道本線の車庫があるからあながち否定できないけど……」

「田町電車区のことか。でも……こう……終着駅って感じがしないよな」

「そうね。どうしても途中駅の感じがするわ」

私が世の矛盾に打ちひしがれている間に先輩たちの会話は元通り、私のわからない方向へと進んでいました。

「それを言ったら新宿も一緒に気がするけどなあ……JRが基本的に素通りだし」

「あら、東京だって京葉線ぐらいしか終点らしい路線がない気がするけど？ 東海道線にしたって今度東北縦貫線ができれば終点じゃ

なくなるわけだし」

「そっちはあんま気にしてないし。なんたつてこっちは新幹線の終^{ターミナル}着駅だからね」

「結那、その汗はどうしたの？ まさか冷や汗？」

「うぐつ……それは……それを言ったら新宿止まりの路線って何があるの？」

「ふふ、京王と小田急を忘れてほしくないわ。あと西武も」

「なにそれおいしいの？」

「スルー！？」

「おい、おまえら落ち着け。両国を忘れてもらつては困……」

「それはないわ」

「話を聞いてもらつ云々以前の問題！？」

両国と聞いて相撲を思い浮かべる私には話を聞く云々以前の問題です。

「……そもそもターミナルの定義ってなんだ？」

那智先輩が今更なことを言い出しました。むしろ私が聞きたいです。

「それは……あれ、なんだろう」

「言われてみるとそうね……」

どうやら先輩たちは「ターミナル」の語感^{ニュアンス}だけで話をしていたようです。むしろそれで会話が成り立つのだから恐ろしい限りですが。

必然的に話はターミナルの定義に移ります。

「終着駅^{ターミナル}というからには始発とか終着列車が多くないと」

「待つて、それなりの規模と路線が通つていればターミナルといえるんじゃないかしら」

「やはりターミナルの象徴は楕形ホームだな。異論は認めない」
定義まで三者三様です。

「那智君の言い分だと品川も東京もアウトってことなの？」

「ちよつと広裕！ ということ！？」

「どうもなにも、JRだろうと私鉄だろうとターミナルに付き物だろう？ 東急の渋谷とか小田急の新宿とか……うちの近くだと豊橋の

飯田線ホームとかがそう」

「どっちにしろ、私に喧嘩売ってない!？」

「そもそも両国って櫛形ホームあった？」

「何を今更。元々総武本線の終着だったからな。東京直通の快速線ができて半分潰したけど今も新聞のやつに使ってるし」

「新聞？……ああ、新聞列車のことね」

「なにそれ？」

「結那知らないの!？ あの北浜武志たけしの娘なのに!？」

「お父さんは関係ないでしょ!！」

「??? あのとて……?」

「ああ、結那のお父さんは有名な鉄道研究家なのよ」当惑している私に滑河先輩が手を差し延べてくれました。が、生憎わけがわからないままです。

「新聞列車ってのは幕張の113系を使った変わり種でだな、文字通り新聞を載せるんだよ。朝っぱらに両国を4+4ヨンミンで出て、千葉に着いたら切り離して館山行きと安房鴨川行きの定期列車ていきにそれぞれ連結。途中で新聞つみにを降ろしつつ昼前には千葉の裏側まで新聞が届く

って寸法だ」

「昼前に……って結構遅くない？ 必要性あるの？」

「結那から必要性という単語を耳にするとは思ってなかった……それはそうと、うーん……正直なんで残ってるのかはわかんないけど、郵便荷物車の名残だと思うんだけどね。ほら、まだ房総半島がディゼルだった頃の」

…… 那智先輩はいつの時代の人なんでしょう。

「滑河さんも千葉から来たからもちろんわかるよね」

転校生の滑河先輩は早くもここ新豊学園しんほうのアイドル的存在になっています。だって、非の打ち所がないんですから。転校初日、つまり私たちの入学式の日（この学校では始業式と入学式の日が同じです）に百人ばかりの男子が玉砕した話は、桜の散った今でも語り種になっています。千葉から来た、というのは初耳ですが。

「もちろん。生で見たこともあるわ。あ、よかつたら写真あるけど持ってくる?」

「是非とも……というわけで両国には楕形ホームがあるんですー。あなたとは違うんですー」

「その言い方はうざい」

「…さすがに調子に乗りすぎじゃないかしら」

「言い返す言葉もございません……」

さすが、巷で『一鉄道に人生を捨てた男』(All life on to the rail)』と囃(は)されるだけがあります。鉄道のこ
とになると人格崩壊するという噂は確かなようです。

「ええっと、何の話だっけ……ああ、ターミナルの話か」

「でも両国がターミナルだったのは電化前まででしょ?」

「千葉方面は両国の独壇場だったんだぞ? 『内房』 『外房』 『犬吠』 『あやめ』 『水郷』……まだ挙げようか?」

「だから過去の栄華に縋(すが)ってるだけじゃないって言ってるの! 今なんて快速も止まらない一途中駅のくせに」

「止まらないじゃなくて止まれないなの! 新宿なんか中央線とライナー以外は素通りのくせに」「伊達に一日の乗降客数世界一の看板を掲げてないわ。ギネスブックにもあるし……あら、そういえば新宿は乗り入れる路線では絶対に負けないわね。山手線に中央快速に中央総武緩行線に埼京線に湘南新宿ライン、メトロは丸の内線に都営新宿大江戸、京王、小田急、西武……これで全部? あと列車名で行くと」

「うーん、俺的には結節点(そつち)の意味じゃなくて終着駅(しゅうちく)の意味で理解してたんだがな……もっともどっちの意味でも中途半端な東京は論外だけだな」

「広裕! それどういう意味!? 私に喧嘩(けんか)売ってるの!?!」

「おやおや結那さん、それは一種の敗北宣言として受けとってよろしいんで?」

「冗談(冗談)じゃないわよ!! とういか東京でターミナルといったら普(ふ)つぽんじん

通の人は東京を思い浮かべるでしょ!!」

「待って、その言葉は聞き捨てならないわ。貫禄なら断然新宿ですよ!」

「貫禄なら両国が一番だろ!」

「広裕! いつまでも昔にしがみつかない!!」

「結那こそ昔を振り返るんだな!」

目の前で繰り広げられる弾丸がごとき応酬に、私にはなす術^{すべ}がありません。互いを貶めあつてるようにしか見えませんが。駅の話なのか個人の話なのか。

その時でした。

ガチャリ。ドアノブの音に部室が静まり返りました。那智先輩も、北浜先輩も、滑河先輩も、そして私もドアの向こうの存在に息を吞みます。

「こんにちは……って先輩方どうされました? ……もしかして、僕の顔に何かついてます?」

ドアの向こうから現れた東郷君　もう一人の一年生部員の東郷^{とうけい}崇平君　の姿に、全員の視線が集まります。

いつになく張り詰めた空気。言葉を発するのも躊躇^{ちゅうちう}われる中、那智先輩が動きました。

「あ、ちようどいいとこに来了。崇平君、東京のターミナルが一番はどこだと思う? ちなみに櫛形^{くしがた}ホームがないとアウトな」

「そうそう、昔じゃなくて今で考えて」

「それなりの路線と本数もあるといいわね」

「え……ええっ!？」

私と違って鉄道好き(鉄道好きの仲間内ではテツというのですが)の東郷君ですが、いきなりの質問に戸惑っています。なにげに先輩たちが条件をつけてますし。無茶振りにも程があります。入り口で固まる東郷君に刺さる先輩たちの目線がさらに獣^{けもの}じみてきました。東京か新宿か両国か(あるいは品川か)で揉めているようなので、東郷君の答え次第では火に爆薬を放り込む結果にもなりかねません。

それだけに東郷君の次の一声に注目が集まっているのです。

「ええっと、僕は上野が一番だと思っんですけど……」

沈黙　先程と同じ緊張に満ちていますが、なぜか先輩たちは皆呆けた顔をしています。ど、どうしたんでしょうか……

と、突然、ガタリと音がして先輩たちは同時に立ち上がりました。そして東郷君を指差して、

「「「それだ（それよ）！！！」」」

……えーっと、全く合点がいかないんですけど？

「さすが崇平君……俺達の条件を全部満たしていやがる……」

「正直言って上野は盲点だったわあ……」

「変に固執してたのが悪かったのね……」

先輩たちはうなだれて謎の反省モードに入っています。何がなんだかさっぱりです。

ふと、入り口に突っ立っていた東郷君と目があいました。

「えっと……何が起きてるの？」

むしろ私が聞きたいんだけど。

こうして先輩たちの白熱した議論は終息を迎えたのでした。収穫は先輩たちの鉄道に対する並々ならぬ思い入れを感じられたことでしょうか。うわべじゃない、本物の熱い思いを。私でもわかるくらいの、純粹な情熱を。

もっとも、この二日後の旅行で、先輩たちの深い鉄道愛を直に感じるようになるのですが、それは別の話ということ。

第一講　了

第一講 あやねの超混沌へケイアーティク〈ターミナル講座（後書き）

この先はネタバレを含みます

ケイアーティク

タイトルの chaotic 混沌の

chaos（英語ではケイアス、慣用的にはカオス）の形容詞形で
す。

一般人から鉄道研究部「鉄研部の面々を見たらどうなるか、という
コンセプトで書きました。読んだ方はわかると思いますが、広裕始
めメインキャラたちが本編と違って自制していないので、文字通り
ケイアーティク
chaoticな展開となっております。ちなみに東京のターミナ
ルは上野派です。もしも『お前それはないだろ』『ふん、小僧が調
子にのりおって。頭が高いわ』等意見がございましたらどうぞお寄
せください。徹底的に叩きのめしてやるんだから！

短編は主人公以外にも花を持たせたいので、次回は結那がメインの
話になると思います。それでは次のお話で！

第二講 結那の大乱闘へバトルチック三分クッキング講座（前書き）

おまたせしました。今回は結那を中心にしたお料理教室です。今回鉄道ネタは一切ありませんのでご安心を。思い切って台詞だけで構成してみました。「」の前は名前です。出てくる名前がわからない人は本編（「みんな乗る気です！」）を見たり本編を見たり本編を見たりすると思います。それではどうぞ。

第二講 結那の大乱闘へバトルチック〜三分クッキング講座

第二講 結那の大乱闘バトルチック三分クッキング講座

結那「はい！ 今日も『結那のテキパキ！クッキング』の時間がや
つてまいりましたー！」

広裕「いやいやいやいや、ちょっと待て」

結那「何？」

広裕「なんで料理教室みたいな出だしなわけ？」

董「細けえこたあいんだよ！」

広裕「よくねえよ！」

結那「ほらほら喧嘩しないの」

広裕「いつもならそれ滑河さんの台詞なんだけどな……ああ、この
部活の良心が……」

結那「時子は家の用事で遅れてくるってさ。さあ、それじゃあ始め
ますか。えー、司会私、北浜結那と！」

広裕「まだそのスタイル？ ……えーっと、那智広裕と」

董「上市董、でお送りします！ あ、ちなみに『』は『キラッ
』って読んでね」

広裕「その はどう読めばいいんだよ！」

結那「さ、今日も元気に張り切っていきーっ！」

董「おーっ！」

広裕「無視かよ！」

結那「今日は広裕でも作れる『ご飯から作る簡単炒飯』です」

広裕「失礼な」

結那「なにが」

広裕「俺だって炒飯ぐらい作れるよ」

結那「……えっ」

董「えっ」

広裕「えっ」

結那「……冗談は置いて」

広裕「さすがに俺でも炒飯はできるさ」

結那「じゃあ、はい」

広裕「？」

結那「さっさと三分で作って」

広裕「さ、三分!？」

結那「出来ないの？」

広裕「じ、十分ならともかく三分は無理があるだろ……」

董「と!　　いうわけで!」

結那「早速作っていきましよう!」

広裕「え、今のは何だったの？」

結那「空気読んでよ広裕!!」

広裕「わ、ちよつと、叩くのはやめろ!」

董「はいカットー」カンカンカンッ!

広裕「……なんでお前力チンコ持ってるんだ？」

董「気にしたら負け負け。さあ、テイク2ツィいくよー!」

広裕「えっ、えっ……えっ?」

結那「はい!　　今日も『結那のテキパキ!クッキング』の時間がやってまいりましたー!」

広裕「いやいやいやいや、ちよつと待て」

結那「今度は何?」

広裕「なんで料理教室みたいな出だしなんだ?」

結那「気分」

広裕「!!（目玉が吹っ飛ぶ）」

董「あつ、那智くん……ほら、目玉目玉」

広裕「おう、すまない……よし装着、じゃねえよ!!」

董「にしし、ばれたか」

結那「……」

広裕「ほら、結那も待ってるしさっさとやるぞ。元はといえばお前

のための料理教室なんだから」

董「そーですね!」

広裕「いい〇もじゃないんだから……」

結那「……私にはあんな優しくしてくれないのに……」

広裕「ん、なんか言ったか?」

結那「う、うるさいっ!」

広裕「ごふっ!? ……結那、みそおち鳩尾に正拳突きはきつい……」

董「そこのお二人さん。いちゃつくのはそこまでにして」

結那「い、いちゃ……!?!」

広裕「正拳突きはいちゃつくに入るのか……?」

結那「……と、とにかく! さっさと作るよ!」

広裕「お、おう……して、材料は?」

結那「とりあえずご飯」

広裕「米のない炒飯ってただの炒め物だろ」

結那「後は適当」

広裕「アドバイス指示適当だなおい!」

結那「一応一番ポピュラーな具は揃えたけど」

広裕「どれどれ、卵に長葱にチャーシューか。シンプルだな」

結那「シンプル・イズ・ザ・ベストなの!」

董「で、これはみじん切りにするの?」

結那「そうそう」

董「……」

広裕「待て、なぜ無言で長葱を俺に押し付ける」

董「泣くよ!? 私泣くよ!」

広裕「玉葱じゃないからそんなことねえよ!! てか長葱ぐらいで泣くなよ! みじん切りにするだけじゃないか!」

董「か弱い乙女に何させる気!」

広裕「俺に包丁の切っ先を向けて脅しといてどこが『か弱い』だよ!! いいからさっさと刻む!!」

結那「私も手伝うから大丈夫だって」

董「……わかった」

結那「まずは長葱を輪切りにするところから……ってちよつと董！？」

董「ん？」

結那「長葱を手で押さえて！ 長葱が転がるって！！」

董「え、だつて手を切ったら怖いじゃん……押さえればいいわけ？」

結那「分かってくれれば……ちよつ、ストーップ！！ 手の平で押さえちゃ駄目だつて！！」

董「だつて押さえろつて言うから……」

広裕「それだと一緒に手もスパツ！ だぞおい！ 猫の手だよね・こ・の・て！！ ……まさか猫の手も知らんとかいうなよな」

董「……」

広裕「図星かよ！」

結那「……ごめん。料理を教える云々どころじゃなかった」
ピンポン。

広裕「ん？ 誰だ？」

結那「誰だろ……とりあえずあたし出てくる」

広裕「お前の家なんだから俺とか出たらむしろびっくりだろ……こっちは気にするな」

結那「わかった」

広裕「……さて、せんせい料理講師の結那がいなくなったから……なにやってんだ上市」

董「猫の手……猫の手……」

広裕「おい、なつてねえぞ」

董「え、ちよつ、えつ？」

広裕「ほら、猫の手はこうやって爪をほぼ垂直に立ててだな、」

結那「急に呼んでごめんね？ ほら、広裕と董も……」

時子「董に料理を教える、だった？ 私もあんまりできない……けど……」

広裕「おつ、滑河さん。いらっしやい」

時子「……えーつと、1、1、0、つと」

広裕「待て！ 俺が何をした！」

結那「それ私の台詞！ なんて董に腋から腕を回してるの広裕！！」

広裕「ん？ ああ、これは猫の手を教えるためにだな」

結那「いいから離れる！」

広裕「ちよつ、やつ、やめろ！ こつちは包丁持ってたぞ！」

董「
ぐすん」

結那「広裕！ なに女の子を泣かせてるの！？ 早く離れなさい！
！」

広裕「なにその俺が悪いみたいなの ってちよつ、ホールド禁止！

お願いだから、お願いだから、せめて包丁は置かせてくれ！」

結那「それでも離れないなら……えいつ」

広裕「まさかの抱きつき作戦！？ しかも堅い！？ は、離せ！ ま
ずは包丁を置かせ」

結那「駄目。広裕が離れない限り離さないからね！」

広裕「密着してて身じろぎ一つできないんだけど！？ 上市 じ

やなくても誰でもいいから、ヘルプ！ ヘルプ・ミー！」

董「……なにこのバカップル」

結那・広裕『カップル言うな！！』

董「あ、そこは全力で否定するところなの……というか私を挟んで
揉めないでほしいんだけど……苦しい……」

三分後

広裕「……つたく、猫の手を教えるだけでこんな時間を使うとは思
わなんだ」

董「……ふう」

結那「どう？ 出来た？」

董「やつと……こんくらい」

広裕「うん……こりゃみじん切りになるのはいつの日か……まあ、
進歩といえば進歩か」

結那「広裕、暇ならチャーシューでも切って」

広裕「あいよー」

董「……で？」

結那「で、って何？」

董「『広裕』君にどこまで迫ったわけ？」

結那「っ……痛っ……ああ、手切っちゃった……」

董「どうしたの結那さん。もしかして動揺なさってます？ けっけっけ」

結那「ど、動揺だなんて」

董「と言いつつも声が震えている結那さんなのであった」

結那「な、なんのことをい、いつてるのか、か、さ、さっぱりなんだけど……」

董「またまたご冗談を。大丈夫、私は那智君を奪^とったりしないから」

結那「と、とっ………！！」

広裕「おーい、結那。さいの目に切つといたぞ………ってどうした？ 顔が赤いぞ？」

結那「に、にやんでもない！」

広裕「熱でもあるのか？」

結那「へ？あ、顔ちか……」

広裕「うーん、熱はないか……ま、いつか。おい結那、気分悪かったら早めに言えよ」

結那「あ……うん」

広裕「さてフライパンフライパン……」

董「さーて……額を突き合わせた感想はいかが？」

時子「あ、私も聞いていいかしら」

結那「えっ！？ ええっ！？」

董「そこまで照れなくてもいいんだよ？」

結那「て、照れてなんかない！」

広裕「おいお前ら、少しは働け。特に上市、元はお前のための料理講座だろうが」

董「う……次は何をすればいいの？」

広裕「とにかくにもまずは仕事みじん切りだな」

さらに三分後

董「いよいよ炒めるの？」

結那「待つて、まずは油を入れて少し熱しないと……よつと」

広裕「あれ、ご飯は解凍しなくて……って、レンジで解凍してる」

時子「あ、いらないの片付け……もうやってあるし……」

広裕「全く結那はおむつはあんまよくないくせにこっぴどく時は手際いいんだから……」

時子「那智君、それを言うなら『おむつ』じゃなくて『お・つ・む』よ」

結那「どっちにしる馬鹿にされてる気がする!!」

広裕「お、ご飯があつたまつたぞ」

結那「あ、そしたらこんなかに入れて……そうだ。もうひとつコンロも空いてるし董もやる？」

董「ええっ……ど、どうすれば」

結那「まずは油をひいて、あ、大匙一杯くらいでいいからって言ったそばから！」

董「えっ、何？」

結那「あーあ、入れ過ぎだつてば……」

広裕「うわ、本当だ。完全にひたひただな……揚げ物でも作る気が？」

董「……そんなこと言われても……」

結那「とりあえず余分な油はその計量カップにでも入れといて。後で戻しておくから」

董「へーい」

結那「油きつたら火にかけて……あ、ちょうどいいや。私が作るから見てて。広裕、卵取って！」

広裕「あいよ」

董「なんか気合いが入ってる……」

結那「まずは卵をひいて……半熟になったらご飯を投入、と」

董「あれ、他の具は？」

結那「それはあとあと。投入^いれたらとにかくかきまぜる!!」

董「うわっ、かきまぜるの速っ!」

結那「そんなことないよ。あ、あんま近づかない方がいいかも。油撥ねるから」

董「うわっ、あつつっ!」

結那「だから言ったのに……よつと」

董「なにこの中華の鉄人ばりの手捌き」

時子「炒飯が……舞^まってる……」

董「あれテレビの幻像^{まやかし}だと思ってた……」

結那「へっ?慣れればたいしたことないよ?」

広裕「……、……、……、悪い、わからん」

結那「そう?……まあいいや。大分炒^{いた}まったし、残りも入れちゃえ」

董「あれ、これで終わり?」

結那「うん、後は長葱^{これ}が生じゃなくなるまで炒めれば。簡単でしょ?」

董「無理無理! ギブ!」

結那「そんなこと言わないの。料理は実践あるのみ。早速やってみよー!」

広裕「おいおい、大丈夫なのかよ」

時子「大丈夫……って何が?」

広裕「滑河さんも見てなかった? ……^{あいつ}上市、『猫の手』もわかんなかったつうのに、火を使わせんのはちょっとな……いや、大分心配だ」

時子「私としては那智君の方が心配だけど」

広裕「ん? なんか言った?」

時子「何にも」

結那「さてと、油はひいてあるからまずは火をつけて……あ、強火

でいいよ」

董「もうご飯入れていい？」

結那「まだまだ。っていうか先に卵を入れるんだって」

董「あつ、そうか」

結那「こつからは時間との勝負だから。ちょっと待って……………今！」

董「えつ、あつ、やつ」

広裕「何やってんだ上市。さつさとやれってうわっ！ 何やってんだ！ 誰も豪快に割れとは言っていないぞ！」

董「あう……………」

広裕「ったく…………あ、結那はいいよ、俺が全部片づけておくから上市は隣のコンロ使ってる。ああ、滑河さんもいいから。適当に上市をサポートしてくれ」

時子「でも那智君は…………」

広裕「俺のことは気にしなくてもいいって。……………んしょ、よしとれた」

結那「あ、洗面所は…………」

広裕「大丈夫、場所くらいわかるって」

時子「あ……………」

結那「……………」

董「……………なんていうさ、小粋というかさ」

時子「痒いところに手が届くというか……………ねえ？」

結那「え、あ、うん、そうだね……………ってなんで私に訊くの!？」

董「や、別に?ただ、結那の『彼氏』さんは甲斐甲斐しいなっと思っただけだけど」

結那「か、か、彼氏!? べ、別に広裕はそういう関係じゃ」

董「あれ、あたし那智君の名前出した覚えはないけどなあ？」

結那「あ、え、いや、その……………」

董「あらら、赤くなってる」

結那「うう……………」

時子「こら董、おちよくりすぎ。えいつ」

董「あたっ」

広裕「おーい進んでるか……って何やってんだ上市」

董「うえええん！ トッキーがデコピンしてきたああ！」

広裕「だからってぶつかってくるな！ つつかトッキーって何だよ！ 新種の鳥か！？」

結那「……多分時子のことだと思うけど……」

広裕「ああ、滑河さんのことか……っておい結那！ まさかコンロつけっぱなしじゃないよな！？」

結那「え、何のこと……って、ちよつと！？ フライパンから火柱出てる！？」

広裕「早く！ つまみを！ 回すんだ！」

結那「い、い、いやよ！ 怖いもん！ ひ、広裕が行ってよ！！」

広裕「ああそうしたいさ 上市がいなかったらな！」

董「ひーん、トッキーがあ……！」

広裕「まだ言ってたよこいつ！ っていうか早く消せ！ 炎出てるし！！」

時子「那智君……」

広裕「何、急に改まって」

時子「……任せた」

広裕「で俺に丸投げかよ！」

董「トッキーが！」

広裕「誰でもいいから消してくれーっ！」

この後火は止めました

一週間後の昼：教室

広裕「……っていうことがあつてだな」

健呉「へえ、おもしろそうじゃない」

広裕「そんな軽いもんじゃなかったぞ、あれは」

勝彦「いいじゃんかよー。おめーの周りは女子がたくさんで」

広裕「やめとけ。少なくとも上市は危険だからやめとけ」

健呉「そう？ 董さんはおもしろい人だと思うけどなあ……」

広裕「そんな風に思うのはお前くらいだと思うけどなあ……お、噂をすれば影だ」

董「あ、健呉君、は、はい、これ」

健呉「お、ありがとう。僕もうおなかぺこぺこだったんだよ」

董「別にお礼なんて……わ、私がやりたくてやったんだから。な、な、なんかあったら言うてね？ んじゃ！」

広裕「めっちゃ慌ててどうしたんだ上市は……あれ、つつかそういえばお前飯は？」

健呉「ん？ これだよこれ」

広裕「お前、もしかして」

勝彦「愛妻弁当とかいうやつですかあー！ ヒューヒュー！」

広裕「えーっと、猿轡ここら辺にねえかなあ……ってお前まさか弁当作ってもらってるのか！？」

健呉「ううん。いつもは持ってくるんだけど董さんに『明日作ってくるから持ってこなくていいよ！ てか持ってこないでお願い！』ってきつく言われたから」

広裕「うん、さらりと自慢ありがとう」

健呉「ん、どうかした？」

広裕「そして彼女持ちはこの余裕である ほら、勝彦があんな落ち込んでるし」

勝彦「くそう……なんで、なんでこんな奴にあんな素敵な彼女がいるんだあ！」

健呉「へへ、照れちゃうな」

広裕「その余裕はどっから出てくるんだ……それはそうと、上市の弁当とか、この前のこともあるし俺は心配でたまらん……」

勝彦「ひぐつ……あむつ、うぐつ……」

健呉「どうなんだろうね。さてと中身は、っと。お」

広裕「おおっ？ ……おおっ、普通だ 見た目は」

健呉「そんなこと言っちゃだめだよ広裕。折角董さんが作ってくれたんだから。けなすのは僕が許さないよ」

広裕「いや、あの上市のことだから何が起きて俺は驚かないぞ」

健呉「やっぱり最初は卵焼きだよー」

広裕「……（……向こうで上市が手を組んで震えてるのは気のせいかな？）」

健呉「あむ……うん、おいしいよ。出汁が効いてて」

広裕「なん……だと……！？ しかも出し巻きだと……！？」

健呉「これはあれかな、豚の味噌漬けかな……うん、おいしい」

勝彦「ひぐつ……彼女おお……えぐつ」

広裕「……向こうで上市が喜んでるのは気のせいだな、うん。って勝彦まだ泣いてるのかよ！」

健呉「……」

同時刻

董「よかった……本当によかった……！」

結那「よしよし」

董「ありがとう結那あああー！」

結那「うわっ、ちょ、ちよつと、飛びつかなくてもいいじゃないの」
董「こうでもしないとあたしの気が収まらないの！」

結那「私の気は休まらないんだけど……それでも董はすごいと思うよ」

董「いやいや、あの後一週間も指導してくれた結那のおかげだよ」
ティーチング

結那「そのぐらい当たり前よ。そもそも董が私に『健呉君に一度董さんの弁当も食べてみたいなあ』って言われたんだけどどうしようー！』って泣きついたのが始まりなんだから」

董「あれ、そうだった？」

結那「そう。それに残りは董の努力だったんだからもっと自身持ってたて。あ、ほら、愛しの『彼』に感想を聞かなくていいの？」

董「……そんなの食べてる姿を見てればわかるよ。これだから彼氏のいない連中の嫉妬は」

結那「なにが嫉妬よ」

董「ていうかー、ぶっちゃけ結那の程の料理の腕があれば那智君なんてイチコロじゃないの？」

結那「ぶふっ！ げほっ、げほっごほっ……いきなり何を言うのよ

董！ 何度も言うてるけどあいつはただの幼馴染だって！」

董「そんなに顔を赤くておいて？」

結那「う、うるさい……あむっ」

董「あらら、やけ食いに入っちゃった……はあ、結那が那智君に特攻できるのはいつになるんだろうね、あむっ……明日は得意にな

った炒飯を作ってみようかな」

第二講 結那の大乱闘へバトルチック〜三分クッキング講座（後書き）

以下ネタバレを含みます

バトルチックは和製英語ですが、意味は言わずもがな。前書きにも書きましたが全文が台詞でできています。はつきり言ってつらかったです。台詞の中に周りの描写を入れないといけないので。ここまですんでくれた人は気付いたでしょうが、実は四章で登場した永原健呉と部員の上市董は彼氏彼女の関係なんです。驚いた？（ドナド的に）

本当はこの設定は後の方で出したかった（健呉の影が薄いから）のですがこの話のネタを思いついた時に「ついでにいれちゃえ」と決意。料理教室をやる理由ができました。このカップルは研修旅行がメインとなる本編ではあまり出す機会がないので、後日短編の方でデート編とか告白編とか二人の関係を書いていきたいと思っています。現在パソコンが使えないため更新が遅れています。もうじき本編の第七章があがる予定です。それでは次のお話で皆さんに会えるまで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6832q/>

School Days on Rail ~ みんな乗る気です！

2011年11月13日07時04分発行